

武術の技を暮らしに生かす

2013年4月15日
NHKラジオ



甲野 善紀(こうの よしのり、1949年-)は、東京都出身の武術を主とした身体技法の研究者。明星高等学校卒。東京農業大学畜産学科中退。古武術に関する著書多数。

1978年武術稽古研究会「松聲館」を設立。2007-10年神戸女学院大学客員教授。体術、剣術、棒術、手裏剣術などの技と術理の探求を行う。

甲野が唱える古武術を基にした身体操作法は、武術やスポーツのみならず、ロボット工学や介護、楽器演奏や舞踊など・他分野からも注目を浴びている。

著書:「武道から武術へ」「身体を通して時代を読む」「古武術の発見」「剣の思想」他多数。

62歳の細身の男が、柔道金メダリストを軽々と?!

今回は、古武術のすごさ、奥深さを体感する。合気道から手裏剣まで古の武術を学び、独自の身体操作術を追究してきた武術家・甲野善紀。

人と口をきくのもままならない幼少期を過ごした甲野は、大学に入り、ひよこの雌雄選別において雄のひよこが生きのままバケツに放り込まれそのまま足で踏み潰されて殺されてゆくという、高度経済成長を続ける効率優先の厳しい現実にショックを受け、「人間にとっての自然とはなにか」を追求する過程で武術に出会う。その後武術のみの世界も一つの効率優先とみなして身体技法一般の研究者に脱皮する。

元巨人軍の桑田真澄投手を指導したり、日本古来の省エネの歩き方「ナンバ歩き」を紹介したことで知られる。

その甲野が、バルセロナオリンピック金メダリストの柔道家・吉田秀彦と対決。禁断の異業種格闘技が実現する。目の当たりにしたのは、小さな力で相手を崩し、ひっくり返す、「虎ひしぎ」「平蜘蛛返し」など、仰天の秘技のオンパレード。なぜこんなことが可能なのか?

甲野の技を最先端のロボット工学で分析すると、「常識では考えられない身体の使い方」をしていた。

重いものを持ち上げるとき、普通はぐっと足を踏ん張るはずなのに、甲野はむしろ「浮いて」いたのだ。

体全体の力をうまく連動させて、相手と一緒に飛び上がるようにして持ち上げていたのである。それは「蹴らない、ねじらない、ためない、うならない」という、今日の常識とされている近代スポーツ理論とは全く異なる身体の使い方なのだ。

介護や荷物運びなど日常の動作を劇的に楽にする技や、指の形ひとつで緊張を解く方法など、驚きの技の数々を伝授。

甲野の紹介する技術は、安定している重心(バランス)をわざと不安定にする事によって、軽い力加減で動かせるようにするもの(重いドラム缶を斜めにして転がすようなもの。)などで、たびたび「不安定な状態は、最も身軽な状態である。」と述べている。

甲野氏の鍛錬法を一つ紹介。一本歯の下駄で普段から歩いたり走ったりされています。

■2003年10月から8回のシリーズでNHK教育テレビ『人間講座』の「古の武術に学ぶ」というテーマの番組の講師として出演。

■2011年11月10日爆笑問題のニッポンの教養(爆笑学問)「古武術でカラダ革命」で特集される。